
白竜奇譚・我を救いしものは。

真下守里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白竜奇譚・我を救いしものは。

【Nコード】

N6732L

【作者名】

真下守里

【あらすじ】

白竜とユアンⅡカイの出会いから、およそ十年――
晴れて故国へ帰り、国王となったユアンⅡカイは、白竜がしでかした「とあること」をきっかけに、出会ったばかりの頃を思い出す……
「出会いの章」の、いわば裏バージョンであり、次のエピソードへの布石ともなっている作品です。

額に、冷えた手拭いがそつと置かれた。

「良かった……何とか熱は引いたみてえだな」

私は、いささか呆然と相手を見つめた。

確か、彼は隣国「下つ国^{しもくに}」との国境にいるはずだった——かの国の軍が約定を破って国境を侵したというこの非常時に、国軍の最高指揮官という立場にありながら、情けなくも流行り病で臥せってしまった私に代わって。

それを可能にしたのは、彼の変化^{へんげ}の能力であつた。彼は、思い描いたものとそっくりに自分の姿を変えることができるのである。当然、私の姿に成り代わることも造作はない。

そのような不思議な能力を持ち合わせているのは、彼が、いわゆる人外のものだったからであつた。今も手拭いの端を口でくわえてその位置を微調整しようと試みている彼は、おおよそ人間の男と同じぐらいの身の丈の、真つ白な竜なのである。

だが、私にとっては、彼が人外かつ異形のものであるということとは、例えば背が高いか低いかといったようなことと同じで、さしたる問題ではない。この近在では昔から「竜は災いを呼ぶ」という話がまことしやかに言い伝えられているのだが、とんでもないことだ。少なくとも、私の二十年ほどの半生の中で、私に「災いをもたらしてきたのは竜などではない——むしろ、自分と同じヒトばかりだったのだから。」

……それはともかくとして。

今問題にすべきは、どうして白竜がここにいるかということだ。
まさか、戦を放り出して私の様子を見に――

「だーいじょうぶだよ」

私の心中を読んだかのように、しかし白竜はにんまりと牙を見せた。

「戦なら一日で終わってたぜ。往復の移動の方が、よっぽど時間を食ったぐれえだ」

「一日……」

ますます私は呆然とする。たった一日で、事を何もかも収めたというのか。いったいどうやって……ひょっとして、変化以外にも何か「魔法」のようなものでも使ったのだろうか。

すると、再びにんまりとした白竜は、事もなげに言い放った。

「別に小細工はしてねえぜ？　むしろ兵法の王道と言ってほしいね。人的被害を最低限に抑えるには、さっさと敵の総大将の首を取っちゃうのに限る――そいつを、ごくごく素直に実践しただけの話さ」
「総大将……」

瞠目して、私は床から跳ね起きた。

「兄――いや、『下の王太子』殿を討ったというのか？」

今年二十五になる下つ国の王太子のことを、すっかりすると私が「兄」と呼んでしまうのは、ほんの三年ほど前まで実際に兄弟として育ったからであつた。

といっても、血縁があるわけではない。

父と実兄三人が次々と身罷つたがゆえに、今でこそ、この「中つ^{なか}国」の国王などという分不相応な地位にある私だが、もともとは王家の四男坊にすぎなかつた。

王太子に万が一のことがあつた場合の「補充人員」は次兄三兄の二人もいれば十分だつたから、そのあとに生まれた私の役割といえは、せいぜい「人質」ぐらいしかない——すなわち、近隣の国々に対して「我々は決してあなたの国に攻め込まない」という約定を結ぶ際、その「証」として相手国へと送られ、もし何らかの事情ができてこの約定が破られるようなことがあれば、その場で殺される。

早い話が「捨て駒」である。

妾腹の子であつたことも相俟^{あいま}つて、私は生まれて早々、まだ目も開かぬうちに「下つ国」へやられ、それっきり、家族の誰にも二度と相まみえることはなかつた。

だから、物心ついたときには、私は既にどつぷりと「人質生活」に浸かつていた。所詮は「道具」でしかない私に下手な思い入れを持つては、いざ有事となつた際にためらいなく首を切れないとでも考えたのだろうか、養父母である国王夫妻は、私とほとんど接触を拒とうとはしなかつた。八つ年上の義姉は、気が向けば多少は遊んでくれることもあつたが、これに嫉妬した王太子が、何かにつけて私を罵倒したり、暴力を振るつたりするようになってからは、面倒

事に巻き込まれるのは御免だとも思ったか、次第に距離を置くようになった。

今思えば、たいそうすさんだ人間関係である。が、当時の私にとつてはこれが「日常」だった。無論、私とて木偶人形ではないから、王太子に殴る蹴るされれば痛いと思っただし、これまでそれなりに優しかった義姉が急によそよしくなれば何となく淋しくも思っただし、けれど、そこでおしまいだった。それ以上何を考えたところで事態が変わるわけではなかったし、誰かに訴えたところで、聞いてくれる者もなかったから。

ゆえに、私は黙って感情の波が過ぎ去るのを待ち、運悪くなかなかその波が去らないときは、ぼんやりと窓から空を眺めた。空にはたいいてい雲がいくつか浮かんでいて、ときにはゆつくりと、ときには足早に、どこかへ流れて消えて行った。そのさまを見ていると、わずかだが心が安らいだ。嫌な記憶も、胸の痛みも、すべて雲たちが持つて行ってくれるような、そんな気がして……

この「日常」に、思わぬ変化をもたらしたのが、白竜との出会いだっただ。

どこから、どのようにしてたどり着いたのだろうか。

王宮の庭園のひとつに置かれた御影石の上に、白竜はぐったりと横たわっていた。

血まみれの体。無残に折れ曲がった翼……その姿が、王太子に叩きのめされたときの自分のそれとどこか重なった気がして、思わず私は彼の体をそっとつかみ、自室に連れ帰ってやるべく手のひらにのせていた。当時の彼は今よりもはるかに小さく、まだ十になったばかりのほんの子どもであつた私の手の中にさえ、すっぽりとおさまってしまうほどだった。

『……な、さい……』

手のひらの上で身を震わせると、かすかに白竜は呟いた。目は固く閉じられていたから、恐らくうわ言だったのだろう。

『ごめん、なさい……悪いのは僕なんだ……』

僕が、僕が……！

……ああ、駄目だ！ 駄目です父様、そんなことをしては……！

……いけない、そこには母様が……母様が……！』

閉じたまぶたの隙間から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

いろいろな意味であっけに取られて、私はしばし硬直していた。竜が目の前に現れただけでも十分な驚きであつたのに、そのうえ、その竜の口から、まさか人語が出てくるとは。

しかも、その言葉は、当時私が使っていた「下つ国」^{しも}のそれでは

なく、実の家族が暮らす「中つ国」のそれであつた。してみると、彼は私の故郷の者なのか。そこで彼は父母と共に暮らしており、何かの事情で別れ別れとなつて、ここに落ちてきたというのか……

そのようなわけで、それから数日が経ち、手当ての甲斐あつて少しずつ傷の癒えてきた白竜が、だしぬけに、

『おまえ、名は何と言つ？』

と尋ねてきたときも、私は全く動じなかつた。驚きも、衝撃も、とうに経験及び自己処理済みだつたからだ。そして、極めて冷淡に答えた。

『ユアン＝カイ』

このとき既に、私は、傷が治り次第、彼をここから解き放つてやろうと決めていた。

親と引き離されて、このようなところに閉じ込められるのは、自分ひとりでたくさんだと思つた。彼だけでも「中つ国」へ帰り、父母と共に暮らしてほしいと思つた——そうでなければならぬと思つたのだ。たとえ哀しい夢を見ていたにせよ、うわ言にその名が出てくるほど、彼は父母を愛しているのだ。ならば、一刻も早くそのもとへ帰るのが、何よりも彼のためになるはず……

その日、私はいつもより多くの時間を空を眺めて過ごした。

本当は、これを機会に彼ともつと話せたらどんなに良いかと思つた。ここでは誰ひとりとして教えてくれない故郷のさまを、せめて聞くことだけでもできたらどんなに……

だが、一度仲良くなつてしまえば、きっと別れがつらくなる。それどころか、逆に引き止めてしまふかもしれない。だったら、いつ

そのうち.....

しかし、そんな私の胸中など知るよしもない白竜は、それからもしばしば私に話しかけてきた。

殊に、私が王太子にひどい目に遭わされた直後などは、しつこいくらいに私にまとわりつき、ちょこん、と肩に飛び乗っては、耳元でぎゃんぎゃんと吼えたてたものだった。

『おまえ、悔しくはないのか？ やり返せとは言わんが、せめて、「やったのは兄上です」の一言ぐらい言ったらどうなのだ！』

『その口は何のためについているのだ、カイ！
たとえどんな立場だろうと、主張すべきところはきちんと主張しろ。そのようなことから、王太子にもなめられるのだぞ！』

『カイ、おまえ、また武術の稽古のときに手抜いていたろう！ 白ばくれても無駄だぞ。おまえの型や動きを見ていれば一目瞭然だ。

おまえは筋がいい。王太子より何倍もだ！ それなのに、わざと手抜いて負けてやるとは……それは、おまえにはもちろん、王太子のためにもならんことなのだぞ。

いいか、もしこれが稽古などではなく、実際の戦であつたら何とする。敵は、おまえのように手抜いてきたりなどはしないぞ！』

……まるで保護者気取りだ。そのくせ、外見が外見だから、余計に失笑を誘われる。今なら本当に失笑してしまうところだが、それを私は必死で噛み殺し、何も聞こえぬふりをしていた。

聞き流せ。何も考えるな。

考えてはいけない——そんなふうに誰かに気づかわれ、理解してもらえたのは生まれて初めてだ、などとは。

認めてはいけない——そうされるたびに、何となくくすぐったい

気持ちになり、胸の奥がほっかりと暖くなるのだ、などとは。

そのような「心地良さ」になど、絶対に慣れては駄目だ。慣れれば、きつと手放し難くなる。白竜を、家に帰してやれなくなってしまう……

私が空を見上げる回数は、さらに増えた。

「……おい、もしもーし？」

声と共に軽く腕を甘噛みされて、私は現実に立ち返った。

「何呆然としてんだよ？」

あ、おまえ、まさか『何も殺すことは……』とか思ってたんじゃないかねだろうな？

ったく、そういうところが甘えっつーの。

前にも言っただろ？ 戦つてのは、手加減しながらするもんじゃねえ。そんなことしてたらこっちが殺られちゃうからな。

それに、王太子がいなくなったことで、おまえは随分と『有利』にもなったんだぞ」

「わかってるさ」

ぶつきらばうに、私は言い返した。

「おまえが勝手にそう思い込んでいるほど、私はお人好しなわけじゃない。」

事が事だっただけに、少々驚いただけだ」

だいたい、あの王太子には、それこそ死ぬのではないかという目に何度も遭わされたのである。こんな立場でなかったら、こちらから一対一の勝負を挑んで、さっさと首級を挙げていたところだ。

「それに、おまえの言わんとしていることについても、わざわざ指摘されずとも察しぐらいつく」

「下つ国」の国王の子どもたちのうち、私自身が面識があつたのは、共に王宮で暮らしていた正妃腹の義姉と王太子の二人だけだったが、王にはほかに、複数の妾宅に住まわせている子が十人ほどあつた。このうち五人は男子で、年齢も王太子や私と同世代だと聞いている。

つまり、今頃は、この五人の王子たちの間で後継争いの火花が散っており、これにそれぞれの王子に与する輩も加わつて、国内は相当紛糾しているはず——それはまた、しばらくの間は国外になど目を向けているゆとりはないということでもあるのだ。

「これで連中は当分の間、我が国には攻め入って来ない。だから、その間に国王としての実績を積み、国力を上げてもおけると言うのだろうか？」

言いながら、ふと私は眉をひそめた。ある嫌な可能性が、頭をかすめたのである。

「もしかすると、縁談の件も今以上にかまびすしくなるのだろうか」

後継問題に関しては、かの国より我が国の方がむしろ深刻だ——私にお鉢が回ってきたことからわかるように、三人の兄たちは、誰ひとりとして世継ぎを残さぬまま逝ってしまったのだから。

次兄は結婚はしたもののまだ子は生さぬうちに、三兄に至っては縁談すら持ち上がらぬうちに、北の隣国である「上^{かみ}つ国^{くに}」との戦で命を落とした。

そして、病を得て亡くなった長兄には、「下^{しも}つ国」国王の一の姫（つまり、前述の義姉のことだが）との間に二人の子があつたものの、いずれも姫だったのである。

そんなこんなで、大臣たちは、私に何とか縁談をと必死で走り回っている。

「下^{しも}」との間がキナ臭かつた間ですら、それは粛々と続けられていた。ましてや、紛争が解決し、さらに「ゆとり」ができてしまえばなおさら……しかも、今回「下の王太子」が、かくの如き運命に見舞われてしまった。これが、大臣たちの格好の「説得材料」になるであろうことは、もはや火を見るより明らかだった。

『畏れながら、陛下の御身にもいつ何が起こるか……』

ですから、後顧の憂いを失くすためにも、ぜひもつと真剣にお嫁様選^{よめ}びの件をお考えになつて……！』

「人質」の次は「種馬」か。まったく、私に期待される役回りに、ろくなものがない。

「まあ、否定はできねえな」

……頼むから、おまえだけでも否定してくれないか。

思わず目で訴えた私を、だが、白竜はあっさり無視してにんまりした。

「なあ。そんなにお仕着せの縁談が嫌なんだったら、さつさと『既成事実』作っちゃったらどうだ？」

その年齢^{とし}なんだ、どこぞに好いた女のひとりやふたりいるんじゃないのか？ そいつらの誰かでも連れてきて、男子のひとりやふたりでも作っちゃえば、爺たちだってひとまずは黙るだろうよ」

「……私に父上の轍を踏めというのか貴様は！」

唸って、私は相手を睨んだ。

そもそも「好いた女」を作れるほど「元気」があり余っているなら、こんなふう^{ふう}に体調が崩れることだってなかっただろう。

それに、たとえそのような存在があったとしても、王宮に入れるつもりはない。

私が即位のため「中つ国」に戻ってきたとき、家族の中でたったひとり、王太后だけが生き残っていた。せめて彼女だけでも存命で良かった、ほかの家族にできなかった分もこれからは精一杯孝を尽くさねば……そう思いつつ、私は彼女との対面に向かった。

ところが、その場で、自分は彼女の実子ではなく妾腹の子だったのだと暗にほめかされた。そして、扉さえ開けてもらえず、拒絶されたのである。

そのとき、私がどれほどの衝撃を受けたことか！ あのような思いは、我が子には（そのような存在ができれば、の話だが）決してさせたくはない——それこそ「甘い」と言われようが何と言われようが。

そんな私の表情を見て、さすがに地雷を踏んだと気づいたらしい。

「まあ、な……おまえの気持ちも、そりゃあわからねえじゃねえが」

ぼそぼそ、と口の中で呟くと、白竜は、短い腕を精一杯伸ばして、くしくしと頬を掻いた。

「しかし、まあ、何だ……せめて、一の姫君がおまえと同年輩だったらなあ」

「……まあ、私もそれは思わぬではないが」

こちらは素直に私も認めた。

実を言うと、持ち込まれたいくつかの縁談の中で、今にも具体化しそうなものが一件ある。それが、「上つ^{かみ}国^{くに}」国王の長女ユイファ姫との話だった。身分的にも正妃としては申し分ないうえ、年齢の割にたいそう聡明で、姿かたちも美しく可憐だそうだ。

ただ、惜しむらくはその年齢だった——私より十五も下だというのである。ありていに言えば、ついこの間まで襁褓^{むつき}をしていたぐらいの幼さなのだ。

ところが、私の反応を見て、白竜は、どういうわけか再びにまにまとした。

「ふうん……なるほど、やっぱり惚れてたんだな」

「どうしてそういう話になる!」

失礼にも程があるぞ——確かに、ユイファ姫の「聡明さ」は決して眉唾というのではなく、実際、その年齢^{とし}にして、大人が読むような書籍も一通り諳^{そら}んじてしまうほどだという。そのような利発な子どもならば、一度会って話ぐらいはしたい気もしないではないが、あくまでもそれは好奇心からであって……

「貴様、まさか私を奇態な嗜好の持ち主だと——」
「ちよつと待て」

今度は白竜の方が、訝しげに遮った。

「おまえ、どこの一の姫の話をしてるんだ？」
「どこの、だと……？」

私は聞き返し……次の瞬間、別の意味で大きなため息をついた。
なるほど、この近在に正妃たり得る「一の姫」はもうひとりいる。
だがしかし——

「それも、とんでもない誤解だ。あの御方は、仮にも義理の姉上ではないか」

養家の姫君だったというだけでなく、長兄と婚姻したことで、今では名実共に義姉となっている。いわば血族も同然だ。

「そりゃ、立場的にはその通りだけだよ」

白竜は、けれど妙にしつこく食い下がった。

「だけどなあ……あの当時、普段はにこりとしなかったおまえが、随分楽しげに花なんぞ摘んでたからよ、俺はまたてつきり……」

「花……」

「何だかまた熱が上がってきたような気がするの、錯覚だろうか。」

「あれは……あれはだな、あくまでも輿入れの祝いのつもりで摘んだだけのことだ！」

笑っていたのも、本当に嬉しかったからだ。

「だってそうだろう？ それまで、私はずっと、彼女を『あねさま』と呼んただけで、あの『姉上気・い』の王太子から鉄拳を食らっていたのだぞ。だが、兄上に輿入れすれば、私にとっても彼女は『本当の姉上』になるのだ。王太子だって文句は言えない。だから、だから……！」

「そうやって強硬に否定するところが、かえってアヤシイんだがなあ」

「そんな白竜の声が聞こえたような気もしたが、空耳だろう。ああ、きつとそうに決まっている——」

白竜の「見解」の真偽はともかくとして、私の中では、義姉のことはとつくに区切りがついている。

彼が言った通り、私は義姉の輿入れの数日前、その祝いの意味もこめて、庭園の雑木林の向こうへ花を摘みに行った。

この場所は、実は義姉自身が教えてくれたのだった。王太子が、まだ姉ではなく乳母めのとにご執心で、乳母が私の世話をしようとする全力で阻止しかかってきた頃、放置されて泣いている私と、そうせざるを得なくて困っている乳母の両方を見かねてのことだったのか、義姉は時折、私をおぶっては、庭園のあちこちへと連れて行ってくれた。雑木林の奥の名もなき花畑も、そうした場所のひとつだったのである。

『綺麗かろ？　ここはな、うちの秘密の場所なんよ。でも、これからは「しいのきみ」とふたりの秘密の場所じゃね』

しいのきみ、とは「四の君」のことだ。さらに厳密に言えば「中つ国の四の若君」——「下つ国」での私の通称である。つまり、出身国名及び国王の何番目の男子なのかということを示す極めて無機的な「記号」で私は呼ばれていたわけなのだが、義姉が「下つ国」独特の言葉の響きで「しいのきみ」と呼ぶと、その「記号」が、世界でたったひとつの、特別な名前になったような気がした。

……所詮は私の錯覚にすぎなかったのだけれど。

私が花束を差し出したとき、義姉は既に「秘密の花畑」のことなど忘れていた。あからさまに怪訝な顔をし、「花嫁衣裳が汚れるか

ら」と早々に私を部屋から追い出した彼女は、恐らく「この忙しいときに、わざわざ雑草など摘んできて」としか思っていなかったろう。

しかし、それは当然のことだ。

子どもの頃には、路傍の小石さえ時には二つとない宝玉に見えたりするもので、それがただの石つぶてにしかすぎないと認識できるようになるのが「大人になる」ということなのだろう。

そういう意味では、他家へ嫁ごうという覚悟を決めた時点で義姉は明らかに「大人になっていた」はずで、それに気づかず、石つぶての如く他愛のない記憶を宝玉よろしく後生大事に何年も抱えていた私の方こそ、愚か極まりなかったのだ。

愚かといえば、そもそも、そうやって義姉の部屋を訪^{おと}つたこと自体が愚かだったかもしれない——ただでさえ姉の結婚に対して病的なまでに神経質になっていた王太子がそのあたりで様子を窺^うっていたことぐらい、少し考えればわかりそうなものだったのに。

もつとも、十五にもなつて姉のことを理由にとやかく因縁をつけるのは、さすがに矜持が許さなかったのだらう。王太子が直接引き合いに出したのは、その朝の武術の稽古で負けたことだった。王太子にとって稽古で私に勝つのは当然のことだったので、負ければ「私が恥をかかせた」という理屈になるのである。ただ、そう言われても困る、というのが、そのときの私の本音だったのだが——何故なら、問題の稽古では、私が手^い抜く暇もなく、王太子が自ら庭の芝に足を取られて転倒したのだから。

だが、それをその場で主張しても、食らう鉄拳の数が倍増するだけのことだったので、とりあえず私は黙って殴られ蹴られてやった。「大好きなあねさま」の部屋の真ん前だったためか、鉄拳も踵も、心なしか勢いが弱い気がする。この分なら、気絶したふりでもすれば、案外すんなりと去って行ってくれるかもしれない……

ところが、その見込みを大きく覆す事態がそのとき起きた。何かが床に叩きつけられる音と同時に、「きゅう！」という小さな叫び声が聞こえたのである。はっとして、私は懷に手をやった。ついさつきまでそこにあつたはずの小さなふくらみが、消えている。

《あん阿呆が……！》

床の上には、一見すると何もなかった。白竜は、ほかの人間の前では術を使って姿を隠していたからだ。しかし、この状況から考えて、彼が私をかばうために懷を飛び出し、果敢にも王太子に向かつて行ったことは容易に想像がついた。まったく、何を考えているのだ——ついこの間、あんな大怪我をしたばかりなのに。彼我戦力の差だって、あまりに歴然としすぎているのに……！

白竜に噛まれてもしたのか、王太子は不機嫌な顔をして脛をさすった。その視線が、不意に床の一点に注がれる。同じ場所に目をやって、私はドキリとした。

白い体が見えかけている——たぶん、意識が朦朧としたか何かで、術が解けかけているのだ。ふん、と鼻を鳴らすと、王太子は迷わず足を上げた。

《このままでは、踏まれてしまう……！》

とっさに跳ね起きると、私は王太子めがけて飛びかかって行った

……

それから一刻^{いっしゅ}ほど後。

この程度の怪我は日常茶飯事だったし、王太子と喧嘩になったときに私だけが悪者にされることもまた日常茶飯事だったのに、白竜は、まるですべての責任が自分にあるかのように恐縮しまくっていた。自分の体ほどもある湿布をずるずると引きずってきては、懸命に私の胸だの腹だのに貼りつけ、そのたびに、身の置き所がないといった表情で、小さく「きゅう……」と呟いて……

そろそろ、「潮時」だろうか。ふとそんな思いが胸中に去来した。

王太子に飛びかかったついでに床から拾って懷に放り込んだおかげで、それ以上人目に触れるという事態は避けられたものの、王太子が、いつ、床にぼんやりと浮かび上がった白い影のことを思い出すやもわからない。思い出したが最後、王太子は、それを見つけ出すまで、王宮中をくまなく探し回ることだろう。そして、その正体がこんな小さな異形のものであると知ったなら……その先のことは、想像するだに恐ろしく、おぞましい。

それに、もし運良く思い出されずに済んだとしても、この通り、向こうっ気が強く無鉄砲な白竜のことだ、熱さが喉元を過ぎた頃に自分の方から同じことを繰り返してしまう可能性も大いにある。何しろ、私の日常生活には、彼の反骨心を刺激する出来事があまりにも多すぎるのだから……

そつと白竜に手を伸ばすと、私はその体が完全に治っていることを確認した。それから、いささかあっけに取られたていの彼をさっ

さと抱き上げて最初に彼と出会った御影石のところまで連れて行き、土地の言葉でぶつきらばうに言い捨てた。

『早う、いね。オレのことなら構んけん。とうに心積もりはできつつたけんね』

そう、怪我が治った以上、おまえはいつまでもここにいるべきではない。家族の元へ帰るべきなのだ。

私なら別に構いはしない。最初からこうするつもりでいたのだから。そのために、あえてこちらからは関わらないよう心がけてもきたのだから……

だから、別に哀しくなどない。淋しくもない。

……それなのに。

どうしてこんなにも、目頭が熱くなってくるのだろう。

どうしてこんなにも、胸の奥がキリキリと痛むのだろう……

白竜と別れてから、私は例によってしばらく空を眺めた。夜空にもやはり白い雲が浮いていて、東から西へとゆっくり流れていた。そのひとひらが、ふと天翔ける彼の姿のように見えた。とたん、視界が水面のように揺れ、私は慌てて目をこすった。

ようやく気持ちが落ち着くまでに、およそ四半刻しはんときを要しただろうか。

真つ赤な目を万が一王太子にでも見られたら、またぞろどんな事態に発展するかわからないので、私は一旦御影石のところへ戻り、その傍らの池の水でさぶざぶと顔を洗った。石の上に、もはや彼の姿はなかった。良かった、聞き分けて、帰ってくれたのだ……

ところが、安堵と、そしていまだ消え去ってくれぬ一抹のざわざわとを胸に自室へ戻った私は、そこで啞然と立ち尽くした。

『遅かったではないか。またあのクソ兄貴にどうにかされているのかと心配したぞ』

悠然と羽づくろいなどしながら、飄々と白竜は言った。

何故なのだ。

瞠目して、私は自問した。しばし考え込んだのち、もしや言葉が通じていなかったのかと思いついた。そこで、相手の「中つ国語」を思い返し思い返ししながら言い直してみた。

『私は、帰れ、と言った！』

しかし、返ってきたのは、全く的外れた反応だった。

『ほう、私の話し方を覚えたのか。なかなか賢いな、カイは』

だから、そういうことではなくて——私は思わず頭を抱えたが、白竜は一向に気にしたふうもなく、にんまりと牙を見せた。

『だがな、わざわざ訳してくれずとも、私とてそのくらいのことはわかったぞ。「だから」、「帰ってきた」のだ——ここにしか「帰れ」ないのでな』

『帰れ、ない……？』

『そうだ』

大きく彼はうなずいた。

『おまえが全く問うてくれなかったので言いそびれていたが、帰るうにも、私は自分がどこから来たのかわからないのだ。いや、それだけではない。実は、自分の名さえ思い出せん。どうやら、頭をひどく打ったせいで、何もかも忘れてしまったようだな』

私はさらに瞠目した。そんな馬鹿な……だって、うわ言ではあんなにはつきりと父母を呼んでいたではないか。それなのに……

しかし、そのとき突然思い出した。「母上が……」そう呟きながら、彼が流した一筋の涙――

《……もしかしたら》

無論、あくまでも推測なのだが、白竜は、ここに来る直前、両親と単に別れたのではなく「死別」したのではないか。だから、頭を打った瞬間に、すべてを忘れてしまった。哀しすぎる出来事を、二度と思い出さなくて……

おもむろに、私は彼の体をつかんで懷に投じた。一瞬、彼は驚いたように顔を上げたが、やがて微笑むようにその灼眼を細め、くると丸くなった――

それからずっと、白竜は私と共にいる。

既に十年は経とうとしているはずなのだが、相変わらず、記憶は戻っていないらしい——ただ、私自身は、彼の言動を見ていて、何となくその「正体」に気づきつつあった。

今回の戦果からもうかがえる通り、彼はかなりの戦上手である。

加えて、政にも精通まつじょうしている。実は、彼が私の「代理」を務めたのは今回だけでなく、今をさかのぼること半年前にも「上つ国」との折衝に出てくれたことがあったのだが（思えば、このときも私は体調を崩していたのだった。もしかすると私は、恐ろしく「本番に弱い」たちなのであるうか？）、その際にも、両国が置かれている状況を的確に見抜いたうえで、「上つ国」の心証を全く害することなく、なおかつ我が国に有利となる方向へと話をまとめて戻ってきたのだ。

これらの能力は、日がな一日暇げにゴロゴロし、気が向くとふらりと散歩に出かける……という、この十年間の白竜の生活の中で培われたものだとはい底思えない。間違いなく、それ以前の経験が反映されたものなのだ。

そう考えると、ひとつの推測が導き出される。例の「竜は災いを呼ぶ」という言い伝えのもととなった伝説によれば、竜は天上に自分たちの国家を築いているという。それがまこととするならば、彼は、そこで、今の私と同じような立場にあったのではないか……

だが、私はそのことを彼に伝えられずにいる。

伝えてやれば良いのだと、理屈ではわかっていた。自分の出自が

はつきりしていた私でさえ、人質として異国の地にあつた頃は、「居場所の定まらぬ不安感」のようなものを漠然と抱き続けていたのである。まして、その出自さえわからぬ彼ならばなおさら……

しかし、伝えれば、彼は恐らく、その真偽を確かめるためにかの国へ戻るだろう。そして、もしその結果が「真」と出たなら……

「どうしたカイ？ 顔色が良くねえぞ。また具合でも悪くなったか？」

「……何でもない！」

かぶりを振ると、私は布団に潜り込んだ。

（きつと、わがままなのだろうな……）

私の推論が正しければ、かの国の者たちだって、白竜の長き不在にきつと困り果てているに違いない。それに、私には、本来そうしなければならぬ義務がある——この十年、彼には計り知れない恩を受けてきたのだから。

白竜には、この「中つ国」の言葉を口伝てで教えてもらった。私の口調がかつての彼のそれに酷似しているのは、ひとえにそのためだ。それなくしては、即位してからこのかたの政務も、今以上に滞っていたはずだ。

どのような立場であろうとも、意見はきちんと主張すべきだと教えてくれたのも彼だった。それなくしては、近隣諸国の、親ほどの年齢の王たちの「所詮は若僧のくせに」という視線や態度に、とっくの昔に押しつぶされていたことだろう。

そして、何より——彼は、私を常に「カイ」という一個人として扱ってくれた。「人質」でもない、「王子」でも「国王」でもない、ひとりの「ただびと」として……そのおかげで、私の心がどんなに

救われたことか。どれほどの憂さを抱えて部屋に戻ってきてても、彼と戯れ、軽口を叩き合えば、すべてが霧散して行く気がする。そうして、また新たな気持ちで次の一步を踏み出すことができる……

だから、今度はこの恩を私が返して行くべきなのだ。彼の心を、今度は私が救ってやる番なのだ。

だからこそ。

だからこそ――

「だからこそ、失いたくない」などと思っては、いけないのに……

…

がばり、と、だしぬけに布団がめくられた。

「あーあー、やっぱりだ」

目の前に、ヒトに変化^{へんけ}した白竜がいた。

その姿は彼が私以外の人間に变^へずる必要ができた場合に、もっぱら使うものだった。本人の願望を多分に反映したものか、すらりと背が高く、目元涼しげな白皙の美男子といった風情なのだが……

「まったく、まーたそうやってひとりじめめそウジウジしやがってんなこつたから、病の虫にもしょっちゅう取り憑かれんだろぅがよ！」

……口さえ開かなければ。

白竜がこの手の言葉遣いに転じたのは、こちらに戻ってきておよそ半年後、城下を出歩くようになってからだと思う——「だと思っ」というのは、当時、私は国王としての仕事に慣れるのに忙しく、なかなか彼を顧みてやれなかったからだだったのだが、ともかく、気がつく^くと、彼はこのように「くだけた」男になっていたのである。

最初、私は愕然とし、それから、いささか複雑な心持ちになった。必死になって白竜の使う言葉を覚え、ようやくそれが使いこなせるようになったと思ったら、当の彼があっさりそれを捨てて、新しい言葉にあっけなく染まってしまった——その事実^{じじつ}に、なにやら「置いて行かれた」かのような焦りと、一抹の寂寥感を覚えたのである。

否、言葉の問題だけではない。彼自身は気づいていないだろうが、態度も、表情も、どんどん変わって行っている。一言で言うなら、「水を得た魚」のように……城下では、そんなにあれこれと楽しい思いをしているのだろうか。

「ま、何があつたのか知らねえけど、あんまり抱え込まねえ方がいいぞ。相談にだったら、いつでも乗ってやるからよ」

その「相談」ができないから、こうして抱え込んでいるのではないか。

だが、それこそ、そのようなことを言うわけには行かないので、私はごしごしと目をこすり、反対方向に寝返りを打った。

「別に、たいしたことではない！」

「あ、そ」

白竜は苦笑した。まあ無理をして……そんな内心の呟きが聞こえてきそうな気がして、ますます私はムツとする。

まったく、この男は、いつまで私を子ども扱いするつもりなのか。確かに、私は今でも彼の半分も物を知っていないと自分でも思う。しかし、その理由の半分は、あくまでも環境が許さないせいだ。私だとて、彼と同様に世間と自由気ままに交われたなら、きっと、きつと——

「まあ、たいしたことねえんだったら、それ以上は詮索しねえわ。してる暇もねえし——ちよいと、ひとと約束してるんな」

「出かけるのか？」

驚いて、私は再び身を起こした。

「戦^{いくさ}から戻ってきたばかりだというのに、いったい何をしに行くのだ」

「何をつて……」

ポリポリ、と白竜は頬を搔いた。

「おまえさあ、戦が終わったあとに男が街へ行くんだぜ？
んなもん、ナニしに行くのに決まってんじゃねえかよ」
「ナニ……」

「いったい、どういう意味だ……」

3（最終話）

（また、「置いて行かれて」しまったな……）

妙に浮き浮きとした足取りで白竜が去って行ってしまつてから、私は深々と嘆息した。のろのろと窓辺に寄り、外を眺める。

眼下には、街の灯が無数にきらめいていた。そのひとつひとつの明かりの下で、今こうしているうちにも、たくさんの出来事が起こっているのに違いない——私になど予想もつかぬような、さまざまな出来事が。

それを知りたいと思うのは、果たして贅沢なのだろうか？　ないものねだりをしてと、笑われてしまふだろうか……？

そういえば、以前、視察で城下を訪れたとき、得も言われぬ香ばしい匂いが鼻をくすぐったことがあった。傍に控えていた大臣のひとりに尋ねたところ、どこぞの屋台の団子屋のものでしょうかと教えてくれたが、同時に、陛下のような御方のお口にするものではありませんとやんわり先手を打たれてしまった。

いつの日か、自らの足で、その団子屋とやらを探しに行けたら、と、ふと思った。視察で通る目抜き通りだけでなく、裏道に入つて、いろいろなことを見聞きできたら、と……

団子のことなど考えていたからだろうか、不意にぐうつと腹の虫が鳴いて私は思わず赤面した。同時に、急激な空腹感に襲われる——この分なら、本復の日もそう遠くはないかもしれない。

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6732/>

白竜奇譚・我を救いしものは。

2011年7月23日13時46分発行